

彌勒と韋提

名畑・應順

る關心は、單なる鑽仰や敬慕に止まるものではなく、彌勒には同じく、韋提には等しいといふ共感を抱き、而もこれを最も大なる慶びとされたのである。

ここにいふ彌勒は佛弟子として傳へられ、釋尊に次で、當來に成佛すると信ぜられて來た彌勒菩薩である。この彌勒菩薩は瑜伽派の始祖とされ、無著の師となつた。大論師の彌勒とは別人である筈であるが、この兩者が混淆して傳へられたところに、後世の淨土教に何か一種の宿命的な對立や論争を招かねばならなかつた誘因が存するやうに思はれる。

彌勒當來成佛の信仰は、早くも經典に現はれ、彌勒の造像も既に印度に見られた。中國に於ては、苻秦の道安以來、彌勒の淨土である兜率への上生を願ふ者が輩出し、六朝には彌勒の造像が多く、著名な大同や龍門の石佛

にも、これが見られる。殊に唐代には、玄奘や窓基によつて彌勒教が鼓吹せられるが、これに先立つて、無著の攝大乘論を祖述する通論家から、觀經下々品の念佛を、別時意とする説が行はれて、西方願生は衰微する有様であつた。道綽、迦才、善導、懷感等の諸師は、何れも力を盡くして、これが會通に當つた。また嘉祥の觀經疏には、彌勒經と觀經との優劣を論じ、道綽の安樂集には、兜率と西方との優劣を四義を以て比較し、迦才の淨土論には、西方と兜率との對論に、別に一章を設け、化主と處所と所化の衆生との三義について、詳しく優劣と難易とを論じてゐる。元曉の遊心安樂道や、窓基の作と傳へられる西方要決にも、この論議は續けられてゐる。

日本に於ては、佛教渡來當時に、既に彌勒の石像が傳へられたといはれ、藤原鎌足が兜率上生者であつたといふ説もある。空海が入定して、兜率に住するといふ傳説も著名である。殊に鎌倉時代には、西方願生の淨土教に對抗的であつた高辨、貞慶等が何れも彌勒兜率の信仰者であつたことは、最も注意すべきことであらう。史家の説によれば、當時民間に於ても、彌勒信仰が相當盛んであつたらしく、この時代の彌勒來迎圖や兜率内院の圖が傳はつてゐるのを見ても、思ひ半ばに過ぎるものがあ

る。親鸞聖人が彌勒菩薩に深い關心を持たれたといふことは、先づ斯様な歴史的背景を概観するだけでも、當然なやうに思はれる。

二

また淨土の三部經について見れば、彌勒は大經と小經とに、對告衆の中の菩薩衆として、その名を列ねられる。殊に大經に於ては、出家の菩薩の中で、淨土成佛の普賢、文殊と並んで、穢土成佛の菩薩として、慈氏菩薩の名が出され、而も「慈氏菩薩等の此の賢劫の中の一切菩薩」とあつて、彌勒は現在世界の一切の求道者を代表する菩薩となつてゐる。このことは大經の後半に於て、佛が彌勒に對して告語される場合に「佛、彌勒菩薩、諸天人等に告げたまはく」といふ記述が繰返され、「汝、及び十方の諸天人民、一切の四衆」とか、「汝、今諸天人民、及び後世の人」とか說かれてゐると、併せ考へられることである。まことに彌勒は現在ばかりでなく、遠く後代までの全人類を代表する者として、教法が授けられるのである。

大經はいふまでもなく、尊者阿難の請問によつて説起こされたものであり、正宗分の要旨たる如來淨土の因果

も、衆生往生の因果も、常に阿難に呼びかけて、説かれてゐる。然るに衆生往生の果を説き畢られた佛が、更に衆生に往生を勧めるために、淨土の勝妙を欣ひ、娑婆の苦毒を厭はしめる、懇切な教誨に入られる段になると、ここに對告者は忽ち一變して、彌勒菩薩となるのである。これについて香月院は、經のこのところには、釋尊が下に付囑流通されるに先立つて、既に勸持流通される意があるから、改めて彌勒を對告者とされるのであり、それは彌勒が補處の大士であるからだと述べてゐる。後の學匠の講述にはこの説を潤色し、或は更に新義を加へるものがあるが、その中に、彌陀の本願は等覺の大士から以下の凡夫に至るまで、上下を簡ばれない一乗の教法であることを示すために、改めて彌勒に呼びかけられたものと考へる説がある。前述の彌勒を諸天人民と併せて呼び上げてある經意から推しても、この説は首肯されてよからうと思ふ。

然るに佛が三毒の苦を説き了つて、淨土の往生を願はしめようとして、大悲の教化を施されると、彌勒は深くこれを領解して、自身の歡喜を述べるのであるが、佛はこれを印可して、彌勒の菩薩行を認め、「彌勒當に知るべし、汝、無數劫よりこのかた、菩薩の行を修して、衆

生を度せんと欲ふこと、其れ已に久しう遠し。汝に從ひて道を得、泥洹に至るもの稱數すべからず」といひ、尋で「汝及び十方の諸天人民、一切の四衆、永劫より曰來、五道に展轉して、憂畏勤苦すること、具さに言ふべからず。乃至今世まで、生死絶えず」と説いて、彌勒を全人類に同ぜしめて、その流轉と勤苦とを痛まれる。古人の科文の上では、前段を彌勒の實行を顯はしたものとし、後段を彌勒の權行を明かしたものと分かたれるが、とにかくここに修道の極致にある聖者彌勒は影を没して、全く流浪果てなき凡人の列に加へられてしまふのである。

三

觀經の請主である韋提希は、頻婆娑羅王の夫人であり、阿闍世の母である。愚癡な女性であり、苦惱に沈む凡夫であつたことは、經の説相から見ても争へない。王の幽閉せられた七重の室内へ麁蜜を運ぶとか、王宮に降臨せられた釋尊に對して、身を地に投げて號泣し、「我、宿し何の罪ありて、此の惡子を生める」と訴へるとか、説かれてあるやうに、どうしても本來的な凡人であつて、聖者とは見えない。それにも拘らず、韋提が觀經の會座に於て、直ちに無生法忍を得たといふことや、また他の

經典に、彼の女が衆生を濟度するため、假に女身を現はした大菩薩として、説かれてゐるといふことから、諸師の間には多く韋提を聖者として取扱はれて來た。然るに善導は、釋尊が既に「汝は是れ凡夫なり、心想羸劣にして、未だ天眼を得ず云々」と説かれた點に著眼して、「韋提は是れ凡にして、聖にあらず」と斷定し、この經がどこまでも彼の女によつて代表される、未來世の衆生のための宗教なることを強調された。このことは周知の如く、正に淨土教義的一大轉廻として注目されるところである。

親鸞聖人が善導の眞意を傳へられたことは、化身土巻に「汝是凡夫、心想羸劣と言へり。則ち是れ惡人往生の機たることを彰はすなり」と釋し、同巻に般舟讚の「韋提は是れ女人の相、貪瞋具足の凡夫の位なり」といふ文を引いてゐられるところでも明らかである。併し聖人はまた一面に、韋提によつて地上に淨土教が興起したといふことから、その背後に佛菩薩の善巧方便を感じて、韋提を聖者と見られたことも著明である。それは諸師の如く、始から韋提を菩薩と豫定するのではなく、善導のはれるやうに、彼の女を我々を代表するやうな、本質的の凡人と見て、而もその凡人の苦惱と求道とによつて、

我々の救ひの道が開かれたといふことを感謝して、その人を凡人ならずと合掌される心持である。教行信證の總序に取上げられた韋提は、實の凡夫が淨業の機として彰はれて、安養を選ばしめられたのであるが、それがやがて提婆阿闍世と共に「權化の仁、齊しく苦惱の群崩を救濟し」と崇められる。而も苦惱の群崩とは、觀經の韋提によつて代表される人間に外ならぬことに留意すれば、聖人の心情に於て、本質的に凡人と見られる韋提と、讀仰的に聖者と崇められる韋提とは、何等の矛盾もなく、いかにも一致してゐることが想はれる。業苦に於て内觀すれば、共に凡夫である韋提も、その誘引を顧みて、外觀すれば、そのまま菩薩と仰がれるのである。

因みに聖人が斯様に韋提に傾倒されたといふことは、何よりも彼の女が苦惱の衆生として、觀經の請主となり、淨土教の正所被の機であつたといふことは勿論であるが、更にそこには女人成佛の問題が控へてゐたのではないかと考へられる。教行信證に於ては、女人については、韋提の外に、信卷の三一問答の結釋に「男女老少を謂はず」と述べられ、化身土巻に引かれた大方等日藏經に、魔女離暗の歸佛發心を説かれてあるのが目に著くが、和讚では觀經和讚が大部分、經の序分に依つて、韋提を中心

に取上げられてゐるばかりでなく、大經和讃と善導和讃とに、それぞれ第三十五願に依る女人成佛が歌はれてゐる。これは先輩も注意されてゐる如く、法華の龍女の成佛に刺戟されてゐられたといふことも考へられるであらう。併し更に直接には、當時一般社會に於て、女人が輕視されてゐたばかりでなく、教界に於ては、殊に女人を無視したやうな實情の中にあつて、聖人が家庭を持たれたといふことから、女人の救ひが切實に感ぜられ、特にこの問題を取上げずにはゐられなかつたといふことも、察するに難くない。

四

何れにしても、本願一乘の宗教に於ては、聖者彌勒は等覺の極位から、凡夫の位置に同じくせられ、凡夫韋提は菩薩としての想定から、本然の素性に還された。聖人が信卷の眞の佛弟子を釋する下に「眞に知んぬ、彌勒大士は、等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉、當に無上覺位を極むべし。念佛の衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超證す。故に便同といふ。加之、金剛心を獲る者は、則ち韋提と等しく、即ち喜悟信の忍を獲得すべし」と、極めて高い調子

を以て歎ぜられたのは、感銘深く讀まされる。彌勒と同じく、韋提に等しいとは、行卷の正信偈、和讃、末燈鈔等、隨處に窺はれるところであり、聖人の深い慶喜を表はすものの如くである。そこに凡聖に通じて、齊入とはいはれ、廻入といはれ、轉入といはれる、本願一乘の教益があり、普遍の教法の聞信がある。

併し翻つて思ふに、本爲凡夫といはれるやうに、愚惡の凡夫を對機とせられる本願の宗教に於ては、必ずしも聖者の救ひを説かれる要はないやうである。諸師の間には、「本凡夫の爲にして、兼ねて聖人の爲にせず」と説いた人もあるが、善導は「聖人の爲にせず」といはれた。それは本願の前には、少なくとも聖者の自覺はあり得ないといふことでもあらう。また現實の人生に於ては、一應聖者に救ひは要としないとも考へられる。それにも拘らず、聖人が至るところに、善人や聖賢の救ひを、悪人や愚凡の救ひに併せて語られてあるといふことは、注意すべきことではなからうか。

歎異鈔の第三條「善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや」の一章はあまりにも著名であり、眞宗が惡人正機の宗教であることは、あまりにも喧傳されて來た。それは今日では殆ど常識化して來たともいへよう。それ

だけに敢へて造惡無碍を募るといふ程ではなくても、悪人の悲しみ、隨つて大悲の深重といふことも、切實に感ぜられない嫌ひがないとはいへない。曾ては世人の常識であつた「悪人なを往生す、いかにいはんや善人をや」といふ言葉も、今日の機会に於ては、また反省さるべきものがあるであらう。況して善人、悪人といつても、その果報から、更に宿業が顧みられてゐると共に、近來はこれに階級的な解釋を加へる向きさへあるといふことになれば、聖者とせられ、賢人といはれ、善人と見られるやうな人々の上にも、親鸞聖人の凡聖善惡が廻入するといふ領解に、一入聽くべきものがあるやうに思はれる。

尙聖人が常に本願一乘の教法を受行する信心を金剛の真心といはれ、彌勒と同じく、韋提と等しいといふことも、上に引いた信卷の言葉の如く、金剛心を媒介とするものである。今はこれについて述べる違がないから、それは他の機會に譲ることとする。

惄々の裡、蕪雜な講述を以て、責を塞いだことを陳謝する。

(この稿は昭和三十一年十月、大谷學會秋期公開講演會に於て發表したものとの要旨に、若干の筆を加へたものである。)